

速報展

# 発掘された鈴鹿 2004

2005. 3. 20 ~ 2005. 7. 3

ご自由にお取りください  
Take Free



天王遺跡 平田遺跡 伊勢国分寺跡  
 伊勢国府跡 宮上道遺跡 甲懸Ⅱ遺跡  
 平野遺跡 三宅神社西遺跡 国府城跡  
 須賀遺跡 里遺跡 竹野一丁目遺跡

天王遺跡第13次発掘調査 掘立柱建物

2004年最優秀遺物発表

'04年に最も調査員を喜ばせた遺物は、平田遺跡第1次調査で出土した磨製石刀でしょう。

全長38cmで、刃にあたる部分の断面はアーモンド形で、丁寧に磨かれています。柄にあたる部分には3条の文様帯があり、2本の平行線のあいだに「||」や「X」の文様が施されています。縄文時代晩期のもものと見られますが、これほど長く、折れの無い石刀の出土はめったにありません。

不思議なことに、この石刀は弥生時代終末頃の方形周溝墓の一部とみられる溝から出土しました。それもきちんと据えられたような状態です。

想像ですが、偶然石刀を掘り起こした弥生時代の人々がその神秘さに恐れをなしてそっと埋め戻したのかもしれない。あるいは、このお墓に葬られた人物がたまたま見つけ、珍しい宝ものとして大事にしていたのかもしれない。



## 鈴鹿市考古博物館

Suzuka Municipal Museum of Archaeology

〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224

TEL0593-74-1994 FAX0593-74-0986

E-mail:kokohakubutsukan@city.suzuka.mie.jp

URL <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/>

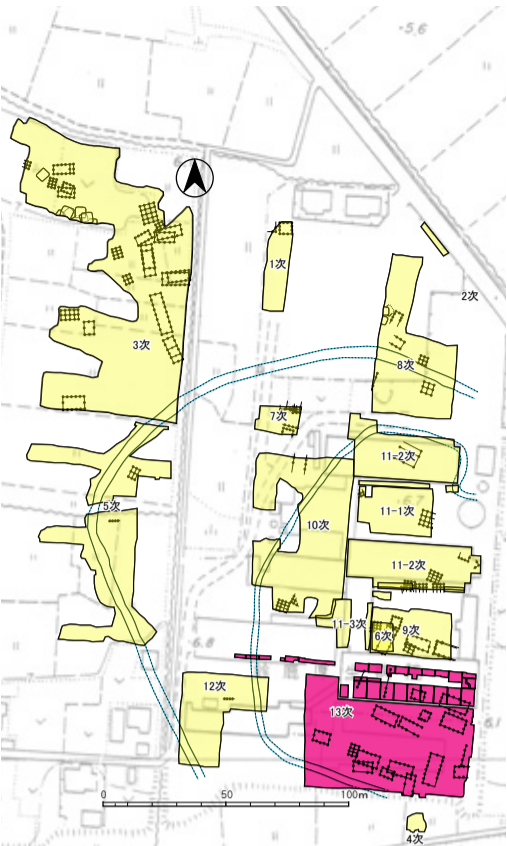
# 天王遺跡 第13次調査

4月8日～10月31日  
岸岡町字天王

天王遺跡は、金沢川に向かつて張り出した標高6～7mの低位段丘の先端部に立地します。'96年から病院建設・宅地造成等に伴い調査を行い、今回で調査次数は13次となり、総調査面積は約1万8千㎡におよびます。

第1～12次調査では弥生時代から室町時代の遺構・遺物を確認しています。弥生時代後期には幅3～5mで深さ0.8～1.3mの断面逆V字形の溝と、幅3mで深さ2mの環濠集落が形成されていきました。

飛鳥～奈良時代には掘立柱建物を中心とした建物群が出現し、L字やコの字形の配置を採る建物群が建てられています。鎌倉時代には大型建物や井戸の検出、そして山茶碗の墨書「北時」から伊勢神宮の御厨（所領）の中心地であった可能性が考えられています。今回の調査で発見された主な遺構は、弥生時代後期の環濠、豎

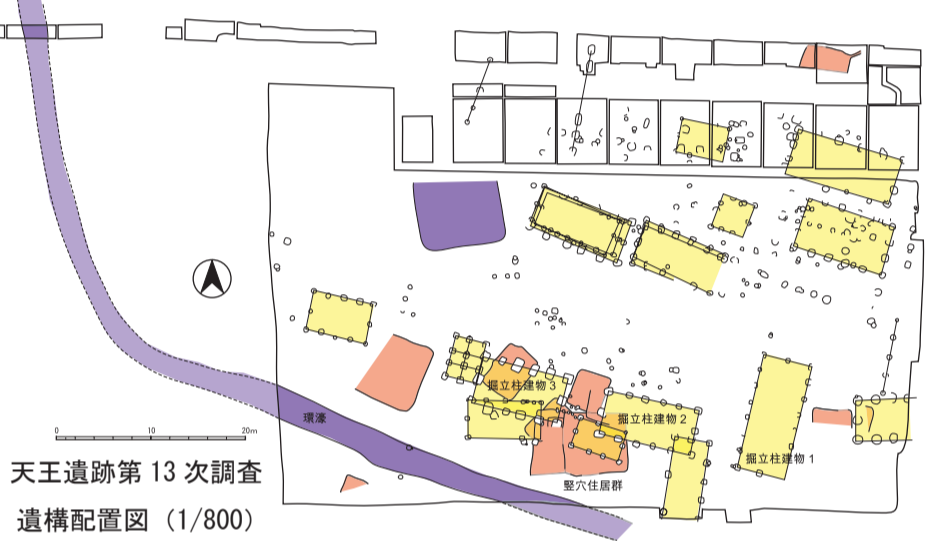


天王遺跡調査区位置図 (1/3,000)

穴住居、飛鳥時代の豎穴住居群、飛鳥～奈良時代の掘立柱建物群です。調査区南西で幅3m、深さ2mの環濠を、北西～南東方向に35mにわたって確認しました。断面の形状はV字形を呈し、中層の黒色層より下からは弥生時代後期の遺物が、黒色層以上からは古墳時代後期以降の須恵器など遺物が大量に出土しています。

豎穴住居は調査区南部を中心に12棟を確認しました。うち一棟は弥生時代後期のもので一辺6.5mあります。その他11棟は出土した土器から飛鳥時代のもものとみられます。6棟以上の豎穴住居が重複している箇所もあります。

掘立柱建物は調査区全域から18棟見つかりました。注目されるのは、調査区南部のL字形に配置された奈良時代中頃～後半の掘立柱建物3棟です。柱筋を揃え、建物の間隔と梁行の長さなどに規則性が見られます。このように整然と配置される建物群は、古代の役所に関係した施設の一画の可能性が高く、この時期の天王遺跡の中心施設と考えられます。



天王遺跡第13次調査遺構配置図 (1/800)

奈良時代を代表する遺物として蹄脚硯（ていきやくん）があげられます。中心的な掘立柱建物群の南側から出土しました。蹄脚硯は都や、国府・郡衙といった地方の役所で使用された硯の種類の中でも格式の高いものです。三重県内では斎宮跡に次ぐ2例目の出土です。

今回の調査では奈良時代中頃～後半の遺跡の中心施設が明らかになりました。これまでの調査では6・9次調査で確認されたL字形の配置の建物群、3次調査のコの字形に配置される建物群はそれぞれ、飛鳥時代中～後葉、飛鳥時代末～奈良時代前葉の中心的施設でしょう。このような古代の役所に類似する、L字形やコの字形に配置される建物群は天王遺跡の場合、地理的条件などからみて港

の管理施設であった可能性が高いと考えています。その理由として、古代の金沢川によって海側に濁りが形成され、それに向かつて突き出した台地という港を管理するに適した場所という遺跡の立地があります。

また、古墳時代後期～飛鳥時代初期には、遺跡の南方にある岸岡山窯で焼かれた土器が天王遺跡から大量に出土していて、その中には焼け歪んだものや融着したものも含まれ、この場所で製品を集積し選別していたと考えられること。岸岡山窯で生産された脚付短頸壺という特殊な形の土器が、三河湾周辺地域の古墳から出



土すること、逆に三河湾岸で使用された製塩土器が天王遺跡に持ち込まれていることなどから天王遺跡を拠点とした長期にわたる伊勢湾上のものの動きが推定されるためです。





須恵器器台？



須恵器筒型器台



須恵器脚付壺



脚付短頸壺



製塩土器



蹄脚硯



平田遺跡調査区全景

**平田遺跡第1次調査**  
4月5日～7月20日  
平田本町一丁目

平田遺跡は鈴鹿川右岸の段丘上の縁辺部に立地しています。中世城館の平田城跡や御門垣内古墳とされる古墳状の高まりが知られていました。調査は宅地造成に伴うもので、道路の建設によって破壊される部分を調査しましたが調査面積は2千200㎡を超えました。

検出された遺構は大きく3つの時期に分けることができます。まず弥生時代終末から古墳時代初期のもの、次いで飛鳥時代から奈良時代にかけてのもの、そして鎌倉時代を中心とした中世の遺構です。

第一の時期の遺構としては、方形周溝墓の一部と考えられる溝1条と一辺が7.4mの大形竪穴住居があります。竪穴住居から赤く彩られた土師器壺が出土しました。飛鳥(白鳳)時代の遺構としては竪穴住居4棟が確認されています。暗文が施された土師器と須恵

器が出土しています。また、この時期の遺構からは格子叩き調整された平瓦がまとまって出土しています。付近に未発見の白鳳寺院が存在する可能性があります。

さらに飛鳥から奈良時代にかけての掘立柱建物15棟以上が確認されています。建物の方位により大きく3つのグループ分けをします。その中でも最も注目されるのは、やや東に触れるものの正方位に近い向きで建てられた3棟からなるグループです。中心となる建物は梁行(南北)3間×桁行3間以上からなる身舎の四方に底がつく建物です。柱を据えるために掘られた穴も最大で1.4×1.1mもあります。このような規模の建物は役所の中心的建物か、国司・郡司などの権力者の居宅しかありません。それらを裏付ける円面硯などの遺物も出土しています。

古代この付近は鈴鹿郡牧田郷の中心的な集落で、郡司を勤めるような豪族が住み、牧田郷を管轄する役所の出先のような施設を営むとともに、付近に氏寺としての寺院を建立していたという可能性が高くなってきました。

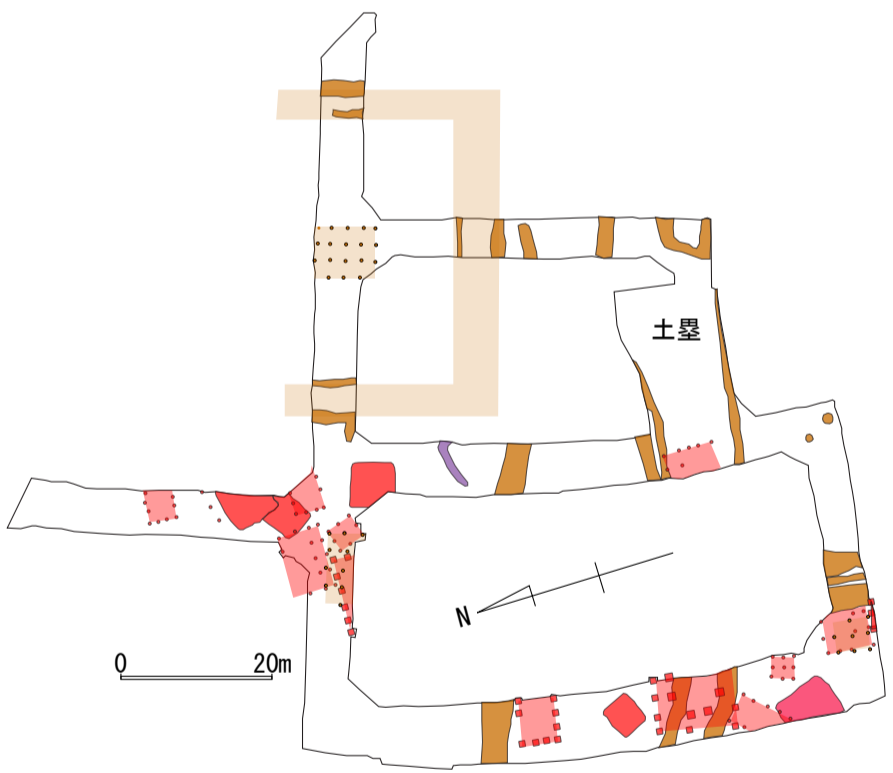
鎌倉時代以降の遺構としては、調査地の東よりで一辺42mの方形に巡る二重の溝(土塁に伴う溝か)の中央に桁行(東西)3間×梁行

4間の総柱建物が建てられていました。溝からは山茶碗や青磁などが出土し、鎌倉時代の有力者の居宅のようです。他にも2棟の掘立柱建物と2基の井戸が見つかっています。御門垣内古墳と呼ばれていた高まりも同様に二重の溝に挟まれていて、土塁の一部が残されたものでした。平田城は応仁元(1467)年に置かれたという記録が残りますが、その前身となるような館か砦のようなものがすでに存在したのでしょうか。

須恵器杯蓋



格子叩き平瓦



平田遺跡第1次調査区遺構配置図 (1/1,000)



須恵器杯蓋



密集する掘立柱建物群



古墳時代竪穴住居



土師器手あぶり形土器



土師器赤彩(パレススタイル)壺



二重の堀(土塁?)に囲まれた居宅



底を持つ大型掘立柱建物

## 平田遺跡第2次調査

9月14日～10月14日

宅地造成が終了した平田遺跡で住宅建設が始まりました。建物の基礎等の工事で遺構が壊される部分の3箇所を調査を行いました。

第1の調査区は残存土塁の西側で、第1次調査の際には土塁の側溝と思われる中世の溝2条と、飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建物が検出されています。今回の調査の結果、同じ掘立柱建物の柱穴列と、連続する中世溝、そして竪穴住居1棟を検出しました。竪穴住居は残りが悪く、出土遺物もありませんでした。

第2の調査区は、造成地の最も西側に位置します。調査の結果、竪穴住居2棟と東西方向に建てられた掘立柱建物1棟などが見つけられました。白鳳期の重弧文軒平瓦片1点も出土しています。

第3の調査区は、第2調査区の道をはさんで東に位置します。第1次調査では中世の東西溝と掘立柱建物1棟が見つかっている場所に隣接し、調査の結果も中世溝と掘立柱建物の続きが検出でき建物の規模が判明しました。



2次第1調査区竪穴住居



2次第2調査区掘立柱建物

## 平田遺跡第3次調査

12月13日～12月24日

さらに、住宅建築にかかる調査が2箇所で行われました。第1の調査箇所は対象地の西南にあたり第1次調査で古墳時代竪穴住居が検出されていた地点の隣接地です。今回の調査で竪穴住居の全体像が明らかになりました。その他、中世溝2条の続きと土坑、ピットが見つけられました。

第2の調査箇所は対象地の北寄り、第1次調査の際に掘立柱建物や竪穴住居が密集していた地点にあたります。調査では既に確認されていた南側に底を持つ掘立柱建物の一部と、溝、ピット多数を確認しました。



3次第1調査区全景

## 伊勢国分寺跡 第30次調査

7月23日～05年2月28日

国分町字堂跡

国分寺とは74年に聖武天皇の詔により各国に置かれた寺院です。国分寺は僧寺と尼寺からなりますが、この遺跡は僧寺跡と考えられています。大正11年10月12日に国の史跡に指定されました。これまで実施された発掘調査により、180m四方の築地塀に囲まれた伽藍地と、南門・中門・回廊・金堂・講堂・僧坊といった主要伽藍が確認されています。

今年度の調査は、塔の確認と、昨年確認されたもののまだ規模等が確定でない僧坊の再確認、そして外周築地の門の有無確認を目的として実施しました。

僧坊調査区は僧坊の中央東寄りに設けました。基壇は後世に削られ、わずかに残る外周溝などから



伊勢国分寺跡第30次調査南東院南門推定地調査区および軒瓦出土状況



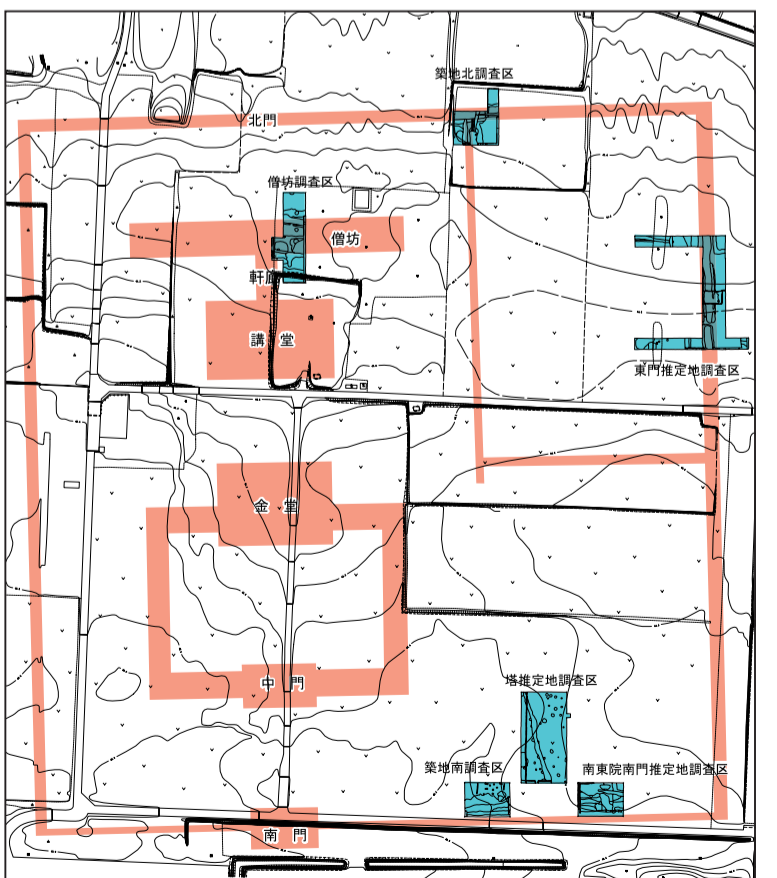
築地北調査区

南北9m×東西72mの規模ではないかと推定されました。今回の調査でも外周溝を確認し、南北幅は9mでよいようです。軒廊は講堂と僧坊を結ぶ廊下で、講堂の主軸から幅を6mと推定しましたが、今回その東半を確認しました。

築地北調査区は、伽藍北辺の築地と伽藍地の内部の東1/3を区画する南北方向築地の交点部分です。両者とも地上部分は全く削平されていきました。そのため内・外の側溝から北辺築地は基底部の幅が約2.6m、南北築地は幅が約2mであったと推定しました。北辺の築地塀とは1条の溝をはさんでT字状につながっています。

東門推定地調査区は、昨年度確認した食堂と考えられる大型掘立柱建物の東側です。東辺築地と食堂との間に施設が無いことを確認するとともに、北東院の出入口となる東門の確認を目的としました。東辺築地も削平され、内・外側溝から基底部の幅が約2.5mであったと推定しました。東門の遺構は存在しませんでした。

塔推定地調査区として回廊の南東を面的に調査しましたが、関連



伊勢国分寺跡第30次調査区配置図 (1/2,000)

するような遺構は確認できませんでした。竪穴住居1棟、中世墓1基などを検出しました。

築地南調査区は、伽藍地の東1/3を区画する南北方向の築地と南辺の築地と接点になるはずの地点です。南辺築地の基底部と内溝が確認できましたが、南北方向築地の基底や側溝は全く削平されたのか検出できませんでした。

南東院南門推定地調査区は、北東院と同様に院の存在が想定されるため、その南門にあたる遺構が存在するかどうかを確認するために設けました。南辺築地の基底部と内溝



刻印平瓦



軒丸瓦・軒平瓦

を確認しました。内溝は幅約1.5mの溝で、築地基底に完全に添わず、調査区西半では北側に曲っています。重なる瓦溜りからは多数の軒瓦を含む完形に近い瓦が出土しています。確実とは言えませんが、ここに小規模な門が存在した可能性があるようです。

結局、今回の調査でも塔の手がかりは得られませんでした。伽藍地を南北方向の築地塀で区画された西側の2/3と考え、塔が発見されないことからこの国分寺跡を尼寺と考える意見もあります。しかし、積極的に尼寺とすべき証拠も確認できていませんので、来年度以降も引き続き塔の確認調査を続けていく予定です。

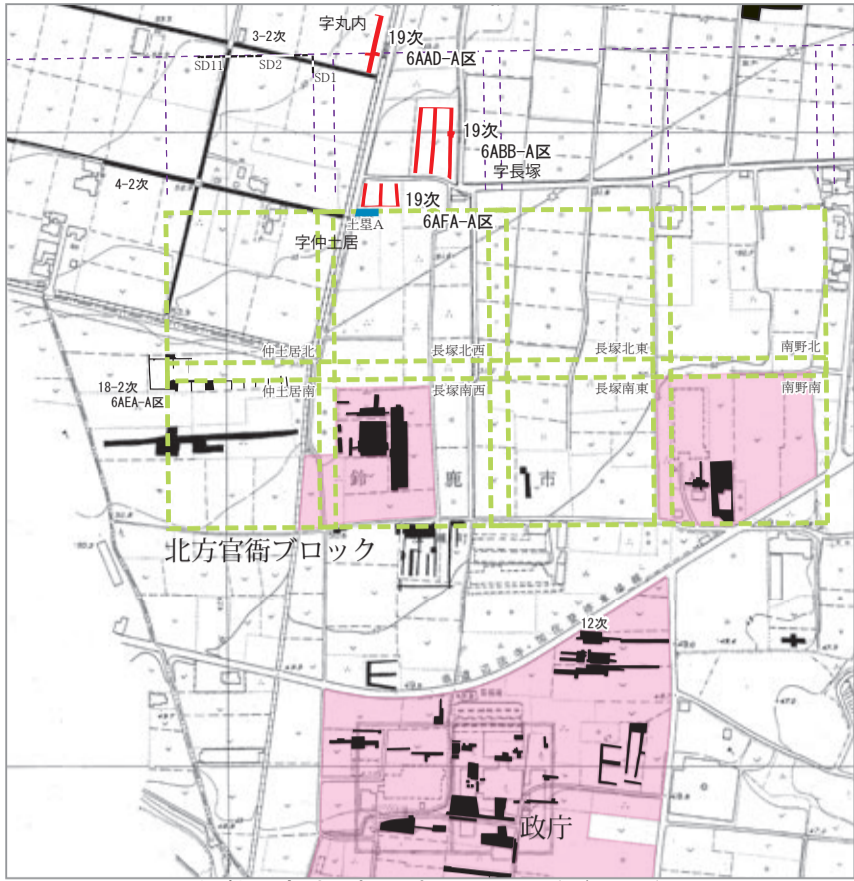
# 伊勢国府跡 第19次調査

8月31日～11月18日

広瀬町字丸内、仲土居、長塚  
伊勢国府跡（長者屋敷遺跡）は  
鈴鹿川の支流安楽川の左岸台地上  
に立地します。遺跡は広瀬町・西  
富田町および亀山市の一部におよ  
ぶ広大な遺跡です。平成3年から  
継続的に調査が実施されていま  
います。

平成4年には遺跡の南側で政庁  
の遺構が確認され、この遺跡が奈  
良時代中ごろの伊勢国府であるこ  
とが確認されました。

その後の調査によって、政庁の  
北方には瓦葺で礎石建ちの建物が  
約120m四方の区画に囲まれ、整  
然と配置されていることが確認さ  
れました。国府に付随する何らか  
の官衙（役所）または館（官舎）



伊勢国府跡発掘調査区配置図 (1/6,000)



伊勢国府跡第19次調査 6AAD-A 調査区東西区画溝

であると考えられています。  
今回の調査は、この官衙群に  
伴う地割の溝が北方にどう広がっ  
ているかを確認することを目的と  
しました。調査区は、広瀬町字丸  
内・仲土居・長塚の3箇所に設置  
しました。  
字丸内の調査区では東西に走  
る幅1m、深さ0.4～0.6mの溝を延



6ABB-B 調査区縦穴住居

長12mにわたり検出しました。こ  
れまでの発掘調査で確認されてい  
る地割の北限溝と状況が一致して  
いることから一連のものと考えら  
れます。

字丸土居の調査区は、遺跡内で  
もわずかに残る土塁跡の北側に設  
定し、土塁に伴う地割溝の確認柄  
尾を目的としました。しかし、遺  
構を確認することはできませんで  
した。

字長塚の調査では、地割内部の  
利用状況を確認しました。広い範  
囲に3条の南北トレンチを設定し  
たところ、東側のトレンチで竪穴  
住居1棟が確認されました。竪穴  
住居は一辺3.5mの不整な方形で、  
床面中央に炉が、東壁にカマド、  
南東隅に貯蔵穴が見られます。カ  
マドの袖には国府の瓦が利用され  
ています。カマド内や周辺・貯蔵  
穴内からは土師器の甕、坏等が出  
土しました。竪穴住居は奈良時代  
後半頃と見られ、これまでに見つ  
かっている竪穴住居同様、国府で  
労役にあつた人物の住居または  
工房のような性格と見られます。



丸瓦



平瓦



土師器坏



土師器鉢



土師器長胴甕

# 宮上道遺跡

4月5日～6月30日  
小田町字宮上道

宮上道遺跡は、安楽川と鈴鹿川  
に挟まれ半島状になった河岸段丘  
上に立地しています。現在、国道  
1号線とJR関西本線が遺跡の東西  
を通っています。発掘調査は市道  
の新設に先立ち実施されました。  
そのため幅5～6m、延長120mの  
細長い調査区となりました。

調査区の中央やや西寄りから竪  
穴住居1棟が見つかりました。南  
東壁には作りつけのカマドがあり  
両袖には平瓦が用いられていまし  
た。材料の平瓦は安楽川対岸の伊  
勢国府跡から持ち込まれたよう  
です。カマド内には鍋の底を支える  
支脚が残り、カマドを壊すときの  
まじないの痕でしょうか土師器碗  
が伏せてありました。奈良時代後  
半～平安時代初頭頃のものと思  
われます。その他、白鳳時代とみ  
られる格子叩き痕のある平瓦も出  
土して、付近に白鳳寺院が存在  
していた可能性があります。

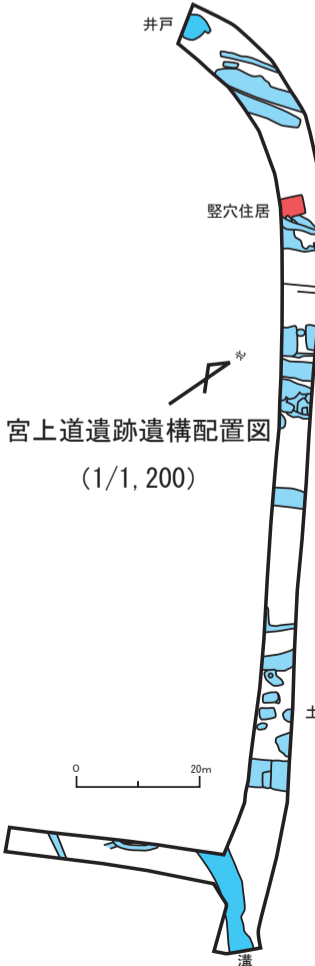
調査区の全域から、多数の溝・  
土坑・ピットが検出されています。  
これら遺構から出土した遺物に  
は、山茶碗・常滑焼そして土師器  
の鍋や皿等があります。少量です  
が瀬戸焼の壺や皿、青磁・白磁な  
り

とも見つかりました。これらの  
遺構は中世のもので、溝は排水や  
土地の区画のため、土坑は水溜め  
やごみの廃棄のために掘られたも  
のと考えられます。ピットには掘  
立柱建物の柱穴と考えられるもの  
があります。また、調査区の  
西端からは井戸が見つかり、曲物  
の底など木製品が出土しました。  
これらは一般的な集落にもみられ  
るものです。



火輪

ただ、一部の遺構から古瀬戸の  
四耳壺や常滑焼の三筋壺そして石  
製五輪塔の火輪部分が出土してい  
ます。これらは中世の墓の蔵骨器  
と墓標として用いられることが多  
いので、付近には中世墓や寺院跡  
が存在した可能性があります。  
その他、縄文土器片や古墳時代  
の土師器なども出土しています。  
調査区の関係から遺跡の全体  
像がつかめたとは到底言えませ  
んが、長期にわたって生活が営ま  
れた複合遺跡であることは確か  
です。



宮上道遺跡遺構配置図 (1/1,200)



宮上道遺跡調査区全景



竖穴住居カマド



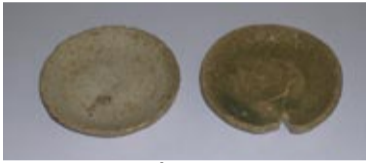
井戸



古瀬戸四耳壺



常滑焼三筋壺



山皿



片口鉢



古墳時代土師器小型鉢



奈良時代土師器杯



格子叩き平瓦



円筒埴輪

甲懸Ⅱ遺跡は、通称サーキット道路のすぐ北側の丘陵地に位置します。国道23号線中勢道路建設に先立ち調査されるものです。平成15年度に実施した試掘調査の際、埴輪の出土が確認された約3千㎡を調査しました。

調査地は西向き緩やかな斜面で、そこに谷状の流路が多数見つかりました。人工のものである確実な手がかりは得られず、自然の浸食によるものと見られます。

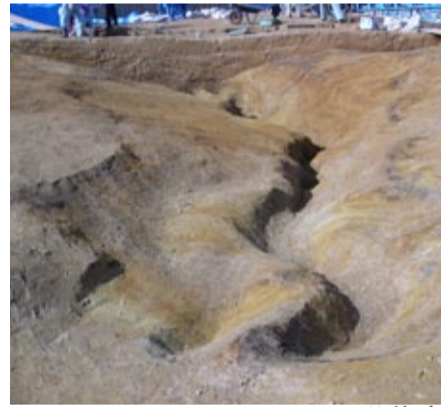
しかし、流路内からは、5世紀末から6世紀初め頃の須恵器や円筒埴輪・形象埴輪の破片が多数見つかっています。形象埴輪には人物・馬や家形のものがあります。旧石器時代の剥片や、弥生時代末頃の土器も出土しました。

確かな遺構を確認することはできませんでしたが、調査区より上方に古墳時代後期の古墳群が須恵器・埴輪生産にかかわる工房などが存在した可能性が高く、それが自然の浸食と後世の開発で失われたものと思われれます。

**甲懸Ⅱ遺跡**  
10月21日～05年2月9日  
稲生町字甲懸



形象埴輪



谷状流路



甲懸Ⅱ遺跡調査区全景

須恵器杯蓋

平野遺跡は鈴鹿川右岸の河岸段丘上に立地しています。鈴鹿川に面した台地の端には八百姫古墳群が分布しています。発掘調査は集合住宅の建設に先立って行われました。

調査の結果、弥生時代の墓である方形周溝墓が見つかりました。規模は溝の内法で南北6m、東西7mです。残念ながら埋葬のための墓壇は残っていませんでした。周溝は全周せず四隅で切れるタイプです。北辺の溝で長さ7.5m、最大幅2m、深さ0.6mでした。北辺溝中央から大形の壺が、南辺溝中央から脚付壺が、そして西辺溝からは2個の壺がそれぞれ残りの良い状態で出土しました。墓に供えられたものでしょう。これらの土器からこの方形周溝墓は、弥生時代の中期後葉に築かれたものとみられます。

その他の遺構として、奈良時代の掘立柱建物と土坑が、平安時代の溝・土坑、鎌倉時代の溝・ピットが確認されています。



平野遺跡調査区全景

弥生土器壺



弥生土器壺



大形壺出土状況



方形周溝墓

## 三宅神社西遺跡

12月8日～12月15日  
国府町字貝下

三宅神社西遺跡は鈴鹿川右岸の段丘上に位置します。遺跡が所在する国府町一体は平安時代後期の伊勢国府の推定地となっており、調査地は、伊勢国総社に比定されている三宅神社のすぐ西になります。調査は、個人の宅地造成に伴うものです。調査の結果、3棟分の掘立柱建物の柱穴が見つかりました。



三宅神社西遺跡掘立柱建物

2棟はそれぞれ調査区の端から、柱間2間分が検出されています。柱の掘り方は1.2～0.8mと大きな方形で、両者の柱筋の方位もちやうど直角に交わるなど企画性が高く、同時に建てられていたものと見られます。1棟の柱間は3m(10尺)、もう1棟の柱間は2.4m(8尺)を計ります。建てられた時期は平安時代前半頃と考えられています。調査区の中央からはもう1

## 国府城跡

10月21日～11月5日  
国府町字長ノ城

国府城跡は鈴鹿川の左岸の段丘上の、東西に谷が入り金床状をなした台地上に立地します。長ノ城という字名から伊勢国府の政庁があったのではないかと考えられてきた所です。また、戦国時代には関氏一族の国府氏が居館を構えた

棟、2間×3間以上の掘立柱建物が見つかっています。柱間は2.4m等間です。柱穴はかなり小さな円形またはいびつな方形で、柱穴の切りあい関係から前二者より後に建てられたものです。

三宅神社の周辺では、これまでの三宅神社遺跡の調査で平安時代の掘立柱建物、井戸等が多数検出されていて、後期伊勢国府関連の曹司や官人の居宅と考えられています。今回確認された建物群も同様の性格を持つものと考えられるでしょう。



土師器耳皿



土師器皿



土師器羽釜



刀子



堀状の溝



国府城跡調査区全景

とされ、段丘の北端には3条の堀が入り込み、土塁が残っています。住宅建築に先立ち発掘調査が行われました。その結果3条の溝が見つかりました。西側で見つかった溝は幅は不明ですが、V字状に落ち込み堀の一部でしょう。室町時代の土師器皿・耳皿・鍋や古瀬戸の碗、そして鉄製の刀子が出土しました。おそらく国府城に関わる施設の一部でしょう。期待された古代の遺物は残念ながらほとんど出土しませんでした。

## 須賀遺跡第4次 発掘調査

11月15日～11月26日  
矢橋三丁目

須賀遺跡は、神戸の市街地に立地する低位段丘の先端部に広がる広大な弥生時代の集落遺跡です。調査地は、須賀遺跡でも東端にあたります。調査は宅地造成に伴うものですが、埋立地のため建物基礎等は遺構面に及ばないので、擁壁の設置に伴う掘削部分のみのトレンチ状の調査となりました。



溝



須賀遺跡調査区全景

調査の結果、溝2条と土坑1基ピット多数が検出されました。出土した土器から弥生時代後期頃の遺構と考えられます。しかし、包含層などからは弥生時代前期や中期の土器も出土しています。



弥生土器鉢



土坑とピット

## 試掘調査から

加佐登町の加佐登神社境内の山林には白鳥塚1号墳が所在します。直径70m以上、2段築成で県内最大の円墳として県の史跡に指定され親しまれています。東側の山林において開発の計画が立案されたため、範囲を確認するためのトレンチ調査が行われました。その結果、驚いたことに墳丘に沿って巡っているはずの周溝と思われる溝が、現在の墳丘裾から東に10m以上離れた地点で見つかったのです。溝の幅は約8mあります。この間は比較的平坦となっ

## 平野遺跡第1次 発掘調査

2月27日～3月15日  
平野町字平林

第2次調査の調査区から、北に200mほど離れた地点です。住宅建築に先立ち発掘調査が行なわれました。

調査の結果、土坑6基と、溝10条ほか多数のピットが確認されました。各遺構からは山茶碗・土師器釜・常滑焼甕・青磁などの遺物が出土しています。これらの遺物から遺構の年代は鎌倉時代以後のものと考えられます。ピットは掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられますが、調査区が狭いことから建物としての柱穴の並びは確認できませんでした。その他、土坑から中世の遺物に混じって奈良時代～平安時代の土



墳丘から見たトレンチ

造出と考えれば、白鳥塚1号墳が帆立貝式の前方後円墳である可能性もでてきました。また、円墳だとしても規模の見直しが必要となります。今後の追加調査の成果が待たれます。

土師器・須恵器片のほか瓦片も出土しています。



里遺跡調査風景



石の詰まった中世の土坑



平野遺跡調査区全景

### 里遺跡発掘調査

8月23日～8月30日  
木田町字里

里遺跡は、波瀬川の左岸に位置し木田町の集落の下に広がっている遺跡です。調査は住宅建築に先立って実施されました。

調査の結果ピット多数と土坑が見つかりました。ピットは掘立柱建物の柱穴と見られ、2.1m（7尺）間隔で並ぶものもあります。柱穴から灰釉陶器が出土したため平安時代以降の建物と見られます。もう1棟建物としてまとまりそうな柱穴の並びがあります。

その他の遺構や包含層からは古墳時代後期から平安時代にかけての土師器・須恵器片や鎌倉時代の山茶碗の破片等が出土しました。里遺跡は鈴鹿川に面した微高地として古墳時代から中世にかけての長い間、人々の生活の場となっていたようです。



調査区全景

### 竹野一丁目遺跡 第4次発掘調査

10月18日～11月10日  
竹野一丁目

竹野一丁目遺跡は鈴鹿川右岸の低位段丘上に立地します。三日市町の近鉄線が走る段丘面からは一段低く、そのため湧き水が豊かです。これまでの発掘調査で鎌倉時代の掘立柱建物・区画溝・水田跡などが多数見つかりました。

今回の調査地は、遺跡の西端にあたります。調査は宅地造成に先立って行われました。

調査の結果、溝3条・井戸状の土坑1基が見つかりました。遺構からは土師器の鍋・皿と、山茶碗・山皿などが出土しています。山茶碗には底に記号や文字の墨書が見られるものがあります。また、わずかですが青磁の破片も出土しています。

出土遺物から見て、鎌倉時代の集落の一部であると見られます。



竹野一丁目遺跡調査区全景



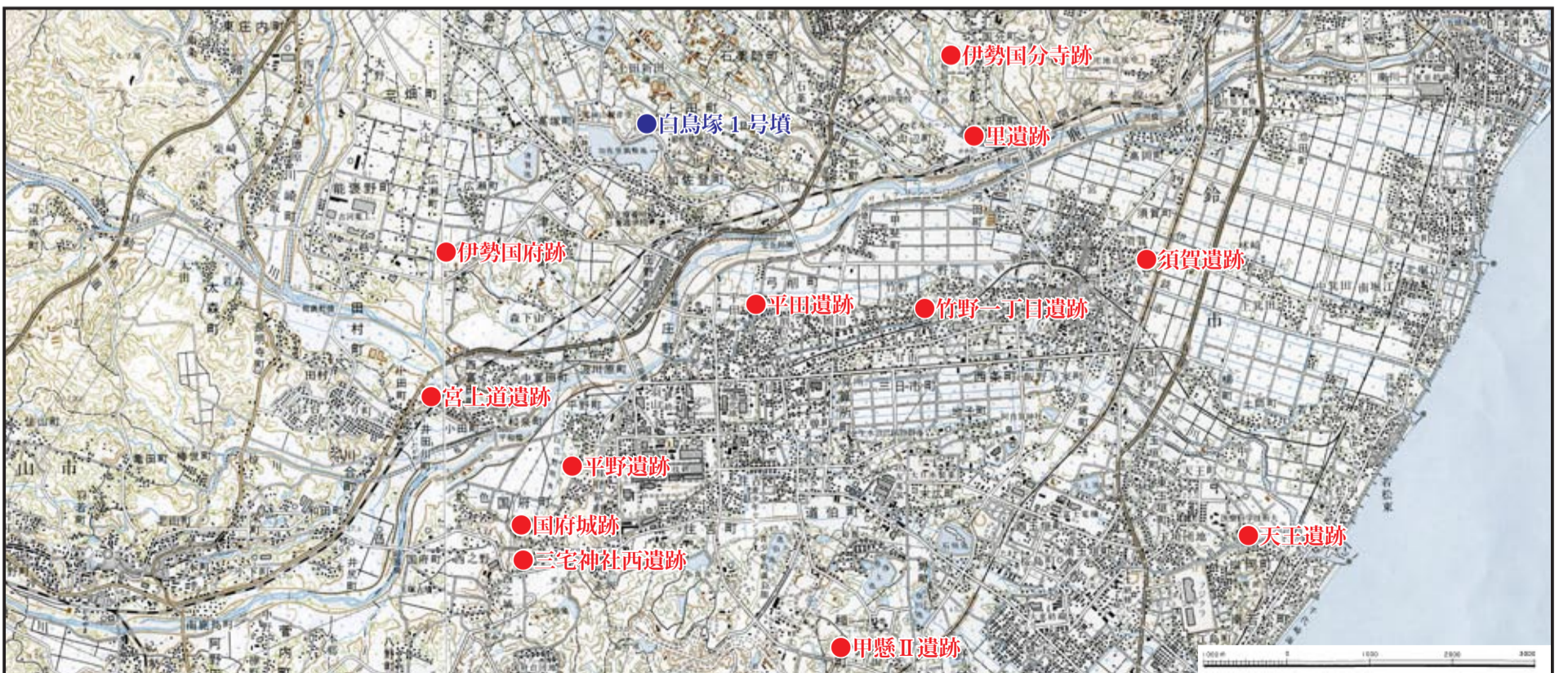
山茶碗底部の墨書



山皿・山茶碗



井戸・溝



発掘調査地位置図 (1/75,000)